

古事記に学ぶ その 20

神功皇后が登場

<1> 新羅への進出

建内宿禰の問い「あなたの名前をお聞かせください」に答えた神は、さらに、「かの國（西の方の國）を求めるならば、天神（あまつかみ）・國神（くにつかみ）・山の神・海や河の神に幣帛（へいはく）を貼って、船の上に吾ら三柱を祀り、灰・箸・皿を海に浮かべて、その海原を進んで行きなさい」と告げた。

すべて、指図通りにして、軍隊を整えて軍船を並べて大海原を進んで行った。この船が起こした波は、（朝鮮半島の東岸にある）新羅の岸に届き、國の半分にまで達した。

新羅の國王は、「これからは天皇のお言葉に従い、馬飼いの仕事でも引き受けます。休みなく貢物をお届けいたします」と服従を誓った。

このことから、新羅の國を「御馬甘（みまかい）」と、百済の國を「渡屯家（わたのみやけ）」と定めた。そして、大后がいつも手にしていた杖を新羅國王の宮殿の前に突き立てて目印とし、墨江（すみのえ）の大神を守護神として祀り、帰国した。

新羅の國を討つ大事がどうなることわからぬ内のこと、大后（息長帯比売命）が身ごもっていた御子が生まれそうになってきた。新羅征伐の大事を成し遂げるまでは出産しないようにと、衣裳の腰のあたりに石を結わえ付けた。そして、新羅征伐を終えて無事筑紫に戻ってきた時に御子が生まれた。この出来事から、大后が御子を生んだ場所を「宇美」と名付けた。この時に大后の腰に結わえ付けた石は筑紫の國の伊斗の村にある。

*伊斗の村=現在の福岡県糸島市 *宇美=現在の福岡県粕屋郡宇美町

筑紫の國の末羅県（まつらがた）の玉島の里に着いて、河の畔で食事をした時に、衣裳の糸を抜き取って、ご飯粒を餌にして、河の中の岩の上で年魚（あゆ）を釣った。

*末羅県（まつらがた）=現在の松浦 *玉島の里=現在の浜玉町

河の名は小川と言い、岩の名は（新羅に勝ったことを意味して）●勝門比売（かちどひめ）と言った。

<2> 都に戻った息長帯比売命

息長帯比売命は新羅を討った後、筑紫を経て大和への帰途に就いた。しかし、都の人心に不穏なものを感じたので、一芝居の策略を考えついた。

棺を乗せる喪の船を用意して、ここに御子を乗せて、「生まれたばかりの御子は早くもお亡くなりになった」という風聞を流した。都に上って行くと、前妻（大中比売命）の子である香坂王（かぎさかのみこ）と忍熊王（おしくまのみこ）が、風聞を聞きつけて待ち構えていた。

兄の香坂王が斗賀野で狩をしようとして櫟の木に登ったところ、巨大な猪が現れて木を倒して、香坂王を食い殺してしまった。

*斗賀野（とがの）=大阪市北区兔我野町（東梅田駅の東側）

弟の忍熊王は軍隊を集めて、息長帯比売命の一行を待った。

実は喪の船には多数の兵が乗っており、ここから飛び出した兵が忍熊王に襲い掛かった。

忍熊王が率いる軍は吉備部（きびべ）の祖先である●伊佐比宿禰（いさひすくね）を将軍としており、

日嗣の御子の軍は丸邇(わに)の臣の祖先である●難波根子建振熊命(なにわねこのたけふるくまのみこと)を将軍としていた。

忍熊王の軍はじりじりと押されていき、山城の國まで行ってしまったが、ここから盛り返して互角の対峙に持ち直した。ここで難波根子建振熊命は、「息長帯比売命はすでにお亡くなりになったので、これ以上戦いを続けても無意味だ」という偽の情報を流して、兵たちに弓の糸を外させた。

伊佐比宿禰はこれをすっかり真に受けて、自軍の兵に武器をしまわせた。

ここを見計らって、御子の軍の難波根子建振熊命は、髪の毛に隠した予備の糸を出して弓に張ることを兵士たちに指示し、再度敵を攻め込んだ。

その結果、御子の軍の難波根子建振熊命は、沙沙那美(のちの滋賀)で、敵兵を一人残らず切り殺して勝利を収めた。そして、忍熊王と伊佐比宿禰は二人とも海に身を投げて死んだ。

<3> 気比(けひ)の大神の話

成務天皇の代から仲哀天皇の代まで大臣として活躍した建内宿禰命(たけしうちのすくねのみこと)は、ここまでの穢れをとる目的で、日嗣の御子連れを連れて禊の行事を行うことにした。

禊の場所を求めて淡海(おうみ:のちの近江)から若狭を越えて訪ね歩き、高志前(こしのみちのくに:のちの越前)の角鹿(つぬが:のちの敦賀)まで行き、そこに仮の宮殿を造り、御子をお泊めした。

その夜、この土地の神である●伊奢沙和気大神命(いざさわけのおおかみのみこと)が建内宿禰命の夢の中に現れて、「私の名と御子の名と取り替えたい」と告げた。

建内宿禰命が承諾すると、「明日の朝、浜辺に出て見なさい。お礼の品を用意しますから」と言う。

翌朝浜辺に出て見ると、鼻の頭に傷のある海豚が浦の中に満ち溢れていた。

幼い御子は、建内宿禰命を通して「私に食事(みけ)の魚をくださり、ありがとうございます」とお礼を申し上げて、この神の名を称えて●御食事大神(みけつのおおかみ)ということになった。この神はのちに●気比大神(けひのおおかみ)と言った。また海豚の鼻の血が臭かったので、この浦の名を血浦(ちうら)と言ったが、今は都奴賀(つぬが)と言う。

<閑話休題>

敦賀に、北陸道総鎮守の気比神社がある。御祭神は、伊奢沙和気大神命・仲哀天皇・神功皇后・応神天皇・日本武尊・玉姫命・建内宿禰命。敦賀の地名の起源(血浦→都奴賀→角鹿→敦賀)は、古事記の「気比大神」の話に由来している。

<4> 酒楽(さくら)の歌

日嗣の御子が禊を済ませて大和へ帰ると、息長帯比売命(母親)は待酒(まちざけ)を醸してふるまった。そして唄を歌った。「この酒は、常世の國にいる少名毘古那神(すくなびこなのかみ)が作ったもの。ぐっと飲み干して……」と。

建内宿禰は、幼い御子に代わって、歌で応えた。

*待酒とは?…来訪する人のために用意しておいて振舞う酒のこと

*少名毘古那神(すくなびこなのかみ)…高天原に最初に出現した三柱の天神(あまつかみ)の一人で、「宇宙の生成を司る神」である神産巢日神(かみむすびのかみ)の、指の股からこぼれ落ちて誕生した。<http://www1.u-netsurf.ne.jp/~TKOB/kojiki07.pdf>

かくして、倭建命の子である仲哀天皇が、筑紫で52歳で亡くなった後、大後の息長帯比売命は、いくつかの難局を乗り越えることができた。

<5> 余談ですが

サラリーマンになって、初めて職場に配属された時の上司(課長)は山口県萩の出身だった。宴会があると必ず歌う故郷の歌があった。新年会・慰安旅行・打ち上げ・忘年会などなど、宴会が多い時代だった。この人の歌は、歌唱力もありきちんと、きれいに歌うのが特徴だった。年に何回か、同じ歌を聴いているうちに、歌詞の意味はともかくとして、歌は完全に覚えてしまった。萩の民謡「男なら」という歌の歌詞はこうだった。(二番までを書いてみる。)

男なら

1、男なら お槍かついで お中間(ちゅうげん)となって

ついて行きたや 下関
國の大事と 聞くからは
女ながらも 武士の妻
まさかの時には 締め襦(たすき)
神功皇后さんの 雄々しき姿が
鑑じゃないかいな
オーシャリ シャーリ

2、女なら 京の祇園と 長門の萩よ

目元千両で 鈴をはる
と言うて 國にことあらば
島田崩して 若衆髷
紋付袴に 身をやつし
神功皇后さんの はちまき姿が
鑑じゃないかいな
オーシャリ シャーリ

幕末の頃、山口県の萩地方で歌われた歌で、「萩の女の心意気」を歌ったと言われている。

古事記を紐解き、神功皇后の活躍を示すページを読んだ後だと、意味が伝わってくるような気がした。

以上